ボランティアが教えてくれたこと

岐阜市立精華中学校 3年
中村 俊太郎（なかむら しゅんたろう）

僕は中学1年生の時にボランティア活動に出会いました。当時の僕は周りの部活や塾の忙しさとは真逆のどうしようもなく暇な休日を過ごしていました。そんな時、飛び込んできたのが地域の川の清掃活動のボランティア。「暇だし、やってみてもいいかな。」というくらいの軽い気持ちで参加してみることにしました。当日現地に行ってみると中学生は5、6人しかいません。「大丈夫かな。」という不安の中でのスタートでしたが、それでも地域の方々の指示に従い、みんなで大きなゴミ袋何袋分にもなる草を集めました。終わったころにはもうへとへとでした。しかし、最後に地域の方々からいただいた「ありがとう。」や「本当に助かったよ。」という声がそれまでの疲れをいっきに吹き飛ばしました。そのとき感じた喜びや満足感は今でもはっきり心に残っています。地域の方からいただいた感謝の言葉は「自分でも役に立つんだ。」「感謝してもらえるんだ。」という自分の存在の意義を強く感じさせてくれるものでした。それから現在に至るまで、歴史博物館での解説の活動や、ジュニアリーダーとしてのイベントのサポートなど、様々な分野のボランティア活動を行っています。歴史博物館での解説活動のボランティアは、学校の授業では教えてくれないような、より深く細かい歴史の知識や、来館者の方々との1対1で解説を行っていく「話の話術」を身につけることができました。ジュニアリーダーの活動では、子どもたちと一緒にバルーンアートやレクリエーションを行う中で、子どもたちのはじけるような笑顔に接すると、本当に充実感があり、自分もエネルギーをもらいました。このように学校生活だけではできない経験や、ふれあい、そして何よりも活動を通して出会ったたくさんの方々から笑顔をいただくことがボランティアの魅力であり、僕が活動を続ける原動力です。また地域の方々とより深く関われるようになったことも自分の財産です。同じ地域に住んでいるとはいえ、ボランティアに行かなければ出会えなかった人々に関わり交流を深めることができました。

しかしボランティア活動はコロナ禍の影響もあって、学校内ではまだまだマイナーな活動で、参加者も少ないという現状がありました。「もっとボランティア活動を学校中に広めたい。」そんな思いで2年生から生徒会の執行委員を務めました。当時は同じ思いを持った人も少なく、冷たい目で見られることもありました。でも僕は、少しでも多くの人に興味を持ってもらい、活動に参加してもらいたいと思い、給食時の校内放送で「ボランティアニュース」を立ち上げました。そして全校に向けて、ボランティアの募集の紹介や、参加者へのインタビューなどの情報を発信し続けました。それから1年、執行委員から生徒会長という立場になった今、情報発信の成果もあってかボランティアの知名度は入学時よりも高まり、参加者も増えてきています。いま、精華中生徒会では、仲間を思いやって行動し、仲間のスマイルを増やしていこうとするスマイル活動に力を入れています。もちろんボランティア活動もその1つです。そして今年の生徒会スローガンは「顔晴れ！」に決まりました。相手のことを思って自分から動くことで、みんなのスマイルを増やしていこうという思いが込められています。ボランティア活動が活発になったことにより、校内では誰かのために行動する生徒が増え、おのずと笑顔の輪も大きくなっています。

ボランティアを通した様々な人たちとの出会いの中で周りの人たちと向き合い、お互いを理解し、本当のスマイルが生まれます。それこそが今を生きる僕たちにとって大事なことだと思います。

小さなきっかけから出会ったボランティアが、地域の方々や仲間とのかかわりを生み出しました。ボランティアに出会えなかったら生徒会長にだってなっていなかったことでしょう。もし募集を見たあの時「面倒くさいからいいや。」と何も行動しなかったら生まれなかった関わりです。その小さな1つの行動が僕の人生を大きく変えました。ボランティアが僕に行動の大切さを教えてくれたのです。これからも、さらなる出会いと成長を求めて行動を起こしていきたいです。